



# 古今東西甘味事情

Kokon-Tozai-Kanmi-Jijyo



おもいこみレーズンバターサンド

ふいうちチョコトリュフ

ほらふき

みぬふりハニーバニラアイスコーヒー

フェイスジョア

いきちがいカステラ

あてはずれ

ひきわけオレオクッキー

ゆうかいラングドシャ

ロールケーキ

ティラミス

## おもいこみレーズンバターサンド



「桃さん、八つ橋は元気ですか？」

ドアを開けた途端、お隣の西原さんが勢いこんで訊ねた。

八つ橋といっても、京都の銘菓の話ではない。彼の愛猫である。

なかなか珍しい名前だとは思うのだが、出会ってから一週間ほどで、その狸と見まがうほど巨大、かつ無愛想な茶色の猫を笑顔満開の彼が抱いてあらわれた時、私は思わず納得した。

それはまあなぜかという、猫のなかには耳がぺこりと折れまがっている種類がいるのだが、八つ橋はそれだった。

まるい顔に大きめの逆三角形の耳が二つ。その様子がどうしてもあれに似ている。薄い正方形の皮を半分の三角形に折って、粒あんを挟んだあのお菓子に。

「お昼寝してますよ」

答えつつ、西原さんが提げている紙袋をすばやくチェックする。彼が家を空ける間の猫の世話をするかわりに、行った先のおみやげをもらうというのが私たちの間に自然とできたルールなのだ。

この前は伊勢の赤福で、その前は確か沖縄のちんすこうだった。おかげで、私もだいぶ日本各地の銘菓通になってきたかもしれない。

「ええと、こんにちは。いつもお世話になってます」

「いえいえ私の方こそ八つ橋には相手をしてもらってます」

やっと挨拶というものを思い出したらしく、細長い身体を折り曲げるようにして彼はお辞儀をした。銀縁眼鏡の奥では、ただでさえ細い垂れ目が、笑っているせいで糸のようにになっている。

ひょんなことから知り合ったこの隣人に、私はなみなみならぬ興味を抱いていた。

断じて、誓ってというが、恋愛関係の話ではまったくくない。ただひたすら、観察材料としてだけである。

というわけで、お茶でもいかがですか、とそこで私が訊ねる。西原さんは常に遠慮のかけらもなくうなづく。それも今では、しきたりのようなものだ。

やかに水を汲んで、火にかけてからおみやげを開けた。その間、西原さんは八つ橋との久しぶりの逢瀬を楽しんでいる。

といえば聞こえはいいが、どうやら愛情は一方通行で、飼い主が心底迷惑そうにしている猫を心底楽しそうに撫でまわしているだけだ。

「今回は北海道におでかけだったんですか？」

「はい！！」

西原さんは嬉々として答えた。この人は何をしても楽しそうな雰囲気なのだが、まあそれはこの際おいておく。

「東北を少しまわって、通りかかった福島でゆべしを買って、仙台でずんだ餅を食べて。山形ではのし梅をはずすわけにはいきませんし、南部煎餅は押しも押されぬ岩手名物ですしね。あ、あと青森で久慈良餅を食べてから、北海道まで行って。でも北海道には残念ながらあんまりいられなかったんですけど、とりあえず一応は帯広まで行って。それで行ったならそれを買わなきゃと思います。お好きでしたでしょうか？」

たったの一泊二日で東北と北海道をそんなにまわれるものだろうか、と疑問に思うが、いつも

といえいつものことなので、つつこまないで置く。

今回は六花亭のマルセイバターサンドだった。銀色の包み紙に古風な文字が印刷された赤いラベルが目立つ。

「食べたことないですけど、おいしいんですね」

これは質問ではなく確認だった。

いつも頭のねじを落としながら歩いているような西原さんだが、お菓子の評価、そのみについては信頼している。

「モチロンです！」

包み紙がちょっと面白いでしょう。それ、依田さんが十勝で最初に作ったマルセイバタのまねっこなんですよ。1974年に出来たお菓子なんですけど、昔と変わらない味で……っていい意味のことですけど。中のクリームが秘訣だと思うんですね。ホワイトチョコとバターなんてすごくしつこそうに聞えますけど、それがそうじゃないんです。でも溶けちゃうので冷蔵庫に入れるの忘れないでくださいね？ そうそう六花亭ってわざわざ自分のとこ専用で小麦粉をつくるんですけど知ってました？

立て板に水の勢いの言葉を聞き流しつつ、ポットとカップを温める。彼は一度お菓子について語りはじめると、自分が満足するまでやめようとはしない。

どうやら乳製品がたっぷり入っているらしいからミルクティはやめよう。となるとダーズリンかセイロンか。

戸棚の前で少し考えてから、結局、買ったばかりのセイロンティー（ディンブラ産）にした。紅茶をいれる準備をしていると、おみやげの能書きを終え、そして八つ橋に愛想をつかされたらしい西原さんが、それぞれに一個ずつお菓子を出して、冷蔵庫に残りをしまってくれる。

おいしい紅茶を入れるコツ、というのは結構色々あるが、そのうちの一つは、ポットにお湯を入れる時、少し高めの位置から勢いよく注ぐことだ。

二人でテーブルに頬杖をついて、砂時計の水色の砂が落ちるのを見ながら、私は出会ってからずっと気になっていたことをずばりと聞いてみた。

「西原さんは何のお仕事をなさってるんですか？」

「当ててみてください」

いたって真面目に彼が言う。

というわけで茶葉を蒸らす間、私はこれまで考えたことを、頭の中でもう一度並べ直してみた。

日本各地にしょっちゅう出歩いているところを見ると自由業だろうか。しかし、ほとんどの平日に、スーツをkachと着込んで結構朝早くから出ていくのを見ると、そうとは思えない。

だが、いつも出掛けて買い込んでくるあの各地の銘菓の量はなんなのだ。

家にいる時でもこの人は、近所のコンビニで山のようにお菓子を買ってくる。

ただの甘いもの好きとしても、あの量をこなすのはちょっと辛いんじゃないだろうか。

「ヒントはですね、甘いものがないと生きていけません」

……チョウチョコやアリじゃあるまいし。

ポットをスプーンでひとませしてから、茶葉を漉しながらカップに注ぐ。きれいな色が出た、と心の中で自画自賛してみる。

「製菓会社におつとめですか？」

考えた末に出てきたのはこんな答えだった。

ライバル会社の製品を食べくらべているとか、新製品の開発をしようとしているとか、そういう理由だったら、まだ、少しだけ理解できるような気がする。

しかし、もしあれだけ糖分とカロリーの消費をしているのにこの体型だとしたらサギだ。ダイエットに奔走する女性の敵だ。

「ぶっぶーはずれで一す」

高らかに宣言してから、彼は突然声をひそめた。

「実はですね、桃さんを信用して言っちゃいますけどね」

「言いたくないなら言わなくてもいいですよ」

「それはそうですが言いたいので言わせてください」

「はあ」

「僕はね宇宙人なんです」

「ほう」

「英語で言うとエイリアンです」

英語の方が何となく凶悪な感じがするのはなぜなのか。

しかも当初の質問からかなりずれた答えである。ヒントの意味もまったくなかった。

私は何も言わずにバターサンドを口に運んだ。おいしい。

さくさくした歯触りのクッキーもおいしいが、特に挟まれたクリームがこたえられない。ラム酒の香りがほのかにするバターにはレーズンの酸味がきいている。それでいて、まったりとやみつきになりそうな甘さだった。

「……あの、六花亭は、お嫌い、でしたか？」

しばらくだまって味わっていると、西原さんがおそろおそろと言った様子で聞いた。しかし訊ねるべきはそこではないような気がしなくもない。

「とってもおいしいですよ？ どうしてですか？」

「あの、紙袋を見られた時、心拍音がちょっと……じゃなくて。ええとこんな顔をされたので」

こーんな、と言いながら彼は思っきり顔をしかめてみせた。鼻にひっかかった眼鏡がずれている。

そこまであからさまだっただろうか。げに食べものの恨みというのはおそろしい、と私は他人事のように思った。

「ああそれは、なんというか……私の逆恨みとでもいいますか」

「どうしたんですか？ お菓子里に何か不純物が入ってたとか！？ そうなんだったら許しておけません！」

「いえ、そんなたいそうなものじゃないです」

私はあわてて否定した。許しておけないというのは、具体的にはよくわからないが穏やかではない。

「ちいさいころに六花亭というお菓子のお店があるということを、はじめて聞いた時にですね、想像力が暴走しまして」

六花というのが雪の異名だとはなぜか知っていたので、雪の結晶のようなお菓子を買っているのだと信じこんだのだった。何年もたった今でも思い出せるくらい、はっきりとした想像である。

てのひら半分くらいの大きさで、ひんやりとしている。色は透明がかった白。結晶そのもののように繊細で、口に入れると優しい甘さがほろりと溶ける。

その後、そんなお菓子が存在しないと知って、なんだか裏切られたような気がしたのだ。勝手に思い込んでおいて、裏切られるも何もないものだけれど。

たとえてみるならば、『E.T.』のビデオのパッケージを見て、かの異星人の皺くちやさ加減に恐れをなし、かなりの長い間ホラー映画だと信じていたことに似ているかもしれない。

ちなみに私はあの映画を初めて観た際、あのエンディングにぼろぼろ泣かされた。自慢ではないけれど涙腺は弱い。

「おいしそうなお菓子ですね」

私の説明を聞いて、西原さんが目を輝かせた。

そういえば、ここで目尻を下げてお菓子を食べている隣人も自称宇宙人だ。

「……そうでしょう」

「今度そういうお菓子を見つけたら、桃さんにもかならず買ってきますね」

約束します、と何回もうなずきながら彼が紅茶を飲み干す。

そうは言われても、私の頭の中にしか存在していないのなのだが。……いやだがしかし、この西原さんならいつか見つけてくるかもしれない。

「楽しみにしてますね」

とりあえず宇宙人宣言を頭のなかから追いだして、お茶のおかわりどうですか、と私は訊いた

。

窓辺で八つ橋が大きな口を開けてあくびをした。

Kokon-Tozai



Kanmi-Jijyo

# Menu

**Sweets** ..... マルセイバターサンド  
(六花亭)

**Drink** ..... ディンブラティー

**Movie** ..... E.T. (1982)  
監督: スティーヴン・スピルバーグ



## Marusei Butter Sand



当社専用の小麦粉でつくったビスケットで、ホワイトチョコレートと北海道産生乳100%のバター、そしてカリフォルニア産のレーズンをあわせたクリームをサンドした、ロングセラー商品です。菓名の由来は、十勝開拓の祖・依田勉三が率いる晩成社が十勝で最初に作ったバター「マルセイパタ」に因み、包み紙もそのラベルを模しています。(写真・説明文ともに六花亭HPより)

ディンブラはスリランカ産の紅茶の一種。水色は明るいオレンジ色。洗みの少ないまろやかな味を持ち、飲みやすい。ストレートやアイスティ、ミルクティにも。

郊外で母と兄のマイケル、妹のガーティと暮らす少年エリオット。彼はある夜、庭で“怪物”を見るが、家族はだれも信じてくれない。実は家の近くの森に、300万光年の彼方から宇宙船が着陸し、乗組員のひとりが離陸に間に合わず置いてきぼりにされていたのだった。“怪物”を誘い出したエリオットは、E.T.と名前をつけ、マイケルとガーティにだけE.T.のことを打ち明け、3人は彼を守ろうと結束する。しかしNASAの科学者たちは、すでにE.T.の存在を嗅ぎ付けていた……。

E.T.



## みぬふりハニーバニラアイスコーヒー



家に帰ると、八つ橋が脱皮していた。

私の住んでいるアパートは狭い。何せ遊びに来た友人たちが付けたあだ名が「靴箱部屋」。

これには天井が低く長方形で、まるで靴を入れるボール紙の箱のようだという意味のほかに、これだけ小さいと靴入れクローゼットくらいにしか使えないという暗喩が含まれている。

つまりあまり名誉ある名前ではないわけで、真実でなかったら異議を申し立てたいところなのだが、彼らにテーブルの下や流しの前という寝場所しか提供できなかった実績には屈さざるを得ない。

そんなことを言っても、住めば都とまではいわないが、埴生の宿もなんとやら。雨風も防げるし、家賃も安い。それよりなにより、ここに引っ越すまで一人部屋というものを持ったことがなかった私にとって、自分だけの空間というのは、あるというだけで贅沢なものなのだ。

というわけで一人暮らしは存分に楽しんでいるのだが、大学生活を楽々と過ごしているとは、この時期とても言えなかった。魔のレポート提出期間だったからだ。

窓の外が白々と明るさを増しはじめ、起きたばかりの鳥が平和に鳴き交わしている時間に就寝、という不規則かつ不健康極まりない生活態度にも、最後の課題が終了した今日やっと別れを告げられる。毎度のように、次からもっと勤勉にという誓いを胸にしても、でもまあ済んでしまったことにはくよくよせずシャワーを浴びてさっぱりしてから気楽な格好をしてくつろぐ、もしくは寝ることだけを一心に、課題を提出して狭いけれども楽しい我が家に帰ってきてみれば、ピバ超常現象。

ピバ。

そう、どうしてこんなに長々しい前置きがあるのかといえば、その異常事態を説明するための心の準備をしていたからなのだ。

.....もしも八つ橋が蝉だったなら、問題はまったくなかっただろう。

蝉の脱皮をご覧になったことはあるだろうか。夏の早朝、木立の下の地面に親指くらいの穴が開いて、そこから出てきた茶色の奇妙なかたちをした虫が幹を登っていくことがある。足場のいいところにたどり着き、準備万端ということになると、背中が割れて、中から綺麗な翡翠色の成虫がゆっくりと出てくる。最初は縮れていた羽根も時間が経つうちにぴんと伸びて、それと同時に体色は緑から茶色などの保護色に変化する。

これがご存知のように、その短い生涯ずっと鳴き続け恋に明け暮れる蝉だ。

とにかく、私が帰ってきたとき、もう脱皮は最終段階に入っていた、らしい。

「ただい」 ま、と挨拶しかけたとき、私の目に入ったのは逆三角形の耳だった。

飼い主が色と形が京都のあの銘菓に似ていると言い張る部分である。確かに似ていなくもない。

そこが通常の八つ橋の色.....茶色ではなく、緑だということに、一番に気が付いた。

ああ、抹茶入りの八つ橋に似てるなあ。

そのときは、そんなのんきな考えしか浮かばなかった。

言い訳をさせてもらえるなら、極度の寝不足で判断力が低下していたのだ。

じわじわと目の前にしているもの——つまり、鮮やかな翡翠色をした巨大な猫と、その下の抜け殻とおぼしい茶色の縞の毛皮——の意味が頭にしみこんで来るなり、私は持っていた鞆を取り落とし、台所に逃げ込んだ。

まるで開けた引出しからゴキブリが飛び出してきた際のような悲鳴を上げたかもしれないが、よくは覚えていない。そういうことにしておいてほしい。

まわれ右して外に飛び出せばよかったものを、なぜこんな逃げ場のないところにとっさに飛び込んでしまったのだろうか。

私は台所の隅で頭を抱えた。

換気扇を取り外しても、腕一本くらいしか外には出せないだろう。

手を突き出してひらひらさせたところで、誰かが気付いてくれるとは思えない。

「クラリィース……」

私は低い声でつぶやいた。言葉にたいした意味はない。英語でもしゃべれたら「オオマイゴード」でも言うところだろう。

ただ先週『羊たちの沈黙』をレンタルビデオで観てから、衝撃を受けたときにはこの言葉が出てきてしまうのだ。ピンチの際に凶悪連続殺人犯の真似をしているのだから変といえば変ではある。

変ということから自然と連想がつながるのは、八つ橋の飼い主、西原さんである。

飼い猫にこんな妙な名前を付けることからわかるように西原さんは奇人だ。別に害があるわけではなく、観察するのは楽しい。が、自分のことを宇宙人だと大真面目に言ったことは記憶に新しい。

しかし八つ橋までにここまで常識外れというか地球外生物のような行動をされてしまうと、私が困る。

猫というからには昆虫ではなく哺乳類、しかも愛玩動物である。いくら八つ橋が巨大で足が短く愛想がなく、あまり鳴かない、はっきり言ってしまえば鳴き声を聞いたことがない、猫だとしても、ペット、なのだと思っていた。

思わされていた、のかもしれない。

くれぐれも人を襲うとかそういうことはしないでほしい、と私は真摯に願った。ホラーは嫌いだ。だいきらいだ。

ここまで真剣に願懸けをしたのは、高校受験の際、試験会場が火事になって受験が延期されるのを祈った時以来だと思う。

八つ橋は魚より遊びで食べさせたコーンフレークの方が好きだったから、もしかすると肉食じゃないかもしれない。というか、そうであってほしい。

そういえばミルクよりは紅茶、しかもストレートの方が好きだった。生意気にも葉による味の違いというのも分かるようで、好きなのはアールグレイだった。調子にのってそればかり飲ませていたので、もう茶葉が残りわずかになっていたのだった。

「今度買わなきゃ……」

ここから無事に出られたら、の話だが。

ガサリ、と何かが動く音がした。

ああだめだ、もうだめだ、ほらもうだめだ。きっと襲われ倒れたところののしかかられ、鼻や耳の穴から体の中に進入されてしまうのだ。で、気が付いた時には全てのことを忘れていたのだが、一ヶ月ほどたつと、胃袋や肺で胴に鬚の模様のついた蛾が孵化し、中から体を引き裂いて、うようよと出てくるのだ。

クラリィース。

ああ映画と現実がごっちゃになっている。それよりは頭から食べられる方が、一瞬で済むし、ずいぶんマシだろう。

どどん気分は急な坂をころがり落ちていく。

遺書はないけれど、形見に残せるようなものはまったく持っていないので大丈夫だろう、といささか捨て鉢な気分になった時だった。

「桃さーん!!!!??」

突然、ボタンと玄関ドアが開き、西原さんが返事も待たずに飛びこんできた。

パニックで私の心臓はきっちり三秒は止まっていただろう。悲鳴をあげる余裕もなかった。

私がもう少し弱ければ、いや乙女なのだからして充分か弱いのだが、私がここで言いたいの  
は心臓に疾患の類などを抱えていないということで、まあとにかくそうであれば有無を言わず  
卒倒していたと思う。

何も起こらないようなので、10.04秒目にそっと台所から顔を覗かせた。

西原さんはひどい格好だった。髪の毛はいつも以上にぼさぼさで、ワイシャツは皺だらけ。ネクタイはかろうじて首に引っかかっていたが、いつもの何も考えていないようにのんきな顔は、  
これまで見たことがないほど必死で汗だらけだった。

失礼かもしれないが、今の西原さんの情けない姿ほどヒーローというものからかけ離れたもの  
はないような気がした。

天の助け、だとは思わなかったし、思えなかったのだが、そういうことなんだろうと心で折り  
合いをつける。

終りよければすべて良し、というやつである。

「ここですよー」

ぐるぐる部屋中を見回して私を探しているようだったので、小声で呼んでみた。

「あああ」

私が台所の隅でしゃがみこんでいる、ということにはまったく頓着せずに、西原さんは息切れ  
しつつ同じように座り込んで訴えた。

「僕は、八つ橋に、対して、ひどい、誤解を！」

私も誤解、というか間違った認識をしていた自覚はある。私は黙ったままで先をうながした。

「本当は!!八つ橋というのは京都で八橋検行を偲んで作られた琴のかたちをしているといってもこ  
まかく言ってしまうと管を半分に切ったような湾曲がついた長方形のちょっとひなびた味がいけ  
る焼き菓子なんですけどその生地を焼く前のものが生八つ橋でそれはやわらかくべったりした長四  
角ですそれで僕は耳のかたちから安易に八つ橋と名付けてしまったんですけどでもあんなふう  
に餡を挟んで三角形に折りたたむお菓子は色々メーカーによって名前が違いますけど正式名称は粒  
餡入り生八つ橋と」

「ダメレ。」

液体窒素と同一温度の声で私は西原さんをさえぎった。

ちょうど良いタイミングで、にゃあ、と同意するような鳴き声があがる。

西原さんの後ろから、例の茶色の巨大猫がこちらを覗くのを、私はぼかんと口を開けたままで  
見ていた。

姿からは考えられないような可愛らしい声だった。

その後、まあ私が軽く叫んだり今度は八つ橋が部屋の隅に逃げ込んだり西原さんがばたばたし  
たりして、落ち着くまでにはかなりの時間がかかった、とだけ言うておこう。

とりあえず色々叫んだり威嚇したりなだめようとしたりで、のどが渇いてしまったから紅茶で  
も入れようか、と棚に手をのぼしかけて、茶葉が切れていることを思い出した。

ふり向いて、西原さんをチェックする。彼は八つ橋を撫でようとして、手を思い切りひっかか  
れたところだった。

「西原さんはアイスコーヒーはお好きですか？」

「甘ければなんでも飲めます！」

見なかったふりをして訊ねると、空元気の返事があった。まあ大丈夫だろう。

冷蔵庫からアイスコーヒーのペットボトルを取り出して、ミキサーに注ぐ。眠気と闘うために試験勉強中はこればかり飲んでた。冷蔵庫にそれを戻して、次は冷凍庫を開けてバニラアイスの容器を手取る。

西原さんは好奇心丸出しで、今度は私の一挙一動を見ている。縁日の飴細工師を子供がじっと見つめているような熱心さで、居心地が悪い。

アイスクリームをスプーンで三杯と、最後に蜂蜜を大きじ一杯ほどミキサーに加え、スイッチを入れた。ぐいーン、と気持ちの良い振動音をしばらく聞いたあと、氷をたっぷり入れたグラスに中身を注ぐ。

予想通り、おいしいです、と一口して西原さんは言った。蜂蜜のやさしい甘さが私も好きだ。毎日飲むぶんには甘すぎるかもしれないが、たまにはこういうものもいい。

西原さんが自分のグラスから少し分けたので、八つ橋も満足そうに皿を舐めていた。

そうやっているのを見ると、ちょっと大きめの普通の猫にしか見えない。

脱皮したあとの抜け殻、つまり毛皮、も部屋中探したのだが、見つけれなかった。

なんだか、私が白昼夢を見ていたのだと言い聞かせてしまいたいような気がする。

「八つ橋の名前をどうしようかと思って」

心配そうに窓辺の愛猫を見やりながら西原さんは言った。

だって僕の誤解のせいで、名前を付けまちがえていたわけですから。本当にあの耳の形と同じお菓子の名前にするとすれば。

「粒餡入り生八つ橋って呼ばなくては……！」

長い。音節にして十二文字。

が、主張する本人はいたって本気だ。変えるとなったら本当に変えるだろう。

この名前を真顔で叫びながら猫をさがし歩く彼を思い浮べて、私は笑いをこらえるのに必死だった。

今でさえ普通の名前とは言えないがこれはもっとすごい。

八つ橋も災難である。

「……『つぶあんいりなま』までを名字にしたらどうですか？」

「名字、ですか？」

「あるでしょう。西原さんにも西原っていう名字が」

「下の名前は次郎左衛門といいます」

じろうざえもん。江戸時代のサムライのような名前だ。

というか次郎ということは、上に兄が居ることなんだろうか。それもまた私の想像の限界をこえる。

「……そう、それで親しい間柄らしく、下の名前だけ呼んでることにすれば」

「桃さんも僕のこと下の名前で呼んでいいですよ」

「それはご遠慮させていただきます」

にっこりと微笑を作って、私は丁重に辞退した。

関西の方に仕事で行ってきたんです。で、おみやげです。

コーヒーを飲み干したあと、生八つ橋と走井餅各二箱ずつを渡すと、西原さんはそそくさと帰る準備をはじめた。

おみやげがいつもより多い気がするのは考えすぎだろうか。

「あのですね、再来週また出張なんですけど……」

「いいですよ」

これしきのことで隣人の観察をやめるのはもったいないし、くやしい。

のど元過ぎれば熱くもないし、それに結局私は八つ橋が嫌いではない。お菓子も、猫（多分）も。

だから私は八つ橋を抱いて帰っていく彼の背広のポケットが、まるで、毛皮かなにかのような

、柔らかくてかさばるものを詰めこんだように、ふくらんでいたのを気にしないことにした。  
急に予定より二日も早く帰ってきたことも。

世の中知らない方がいいこと、というのも確かに存在するのだ。

Kokon-Tozai



Kanmi-Jijyo

# Menu

- Sweets** ..... 粒餡入り生八つ橋  
走井餅（友情出演）
- Drink** ..... ハニーバニラアイス  
コーヒー
- Movie** ..... 羊たちの沈黙（1991）  
監督：ジョナサン・デミ

## Honey Vanilla Ice Coffee



材料（たっぷり1人分）

アイスコーヒー（冷えてなくてもそれはそれで）  
グラス7分めくらい

バニラアイスクリーム 大きじ3

蜂蜜 大きじ1

氷 適量

1. 材料をぜんぶミキサーにかける。
2. 氷を入れたグラスに注ぐ。
3. おしまい！

\*アイスコーヒーがない場合は、インスタントコーヒーを熱湯で溶き、あたたかいうちに蜂蜜も入れてよく混ぜて作ってもよい。

\*材料の量は好みによって変える。

\*たしかずいぶん前にド○ールが配っていた冊子に載っていたもの。



## 羊たちの沈黙

FBIアカデミーの訓練生クラリスは、若い女性の皮を剥いで死体を川に流す連続殺人死パッファロー・ピルの捜査に手詰まりを感じたFBI上司ジャックの密命を帯び、州立の精神病院を訪れる。それは、患者を9人も殺してそこに隔離される食人嗜好の天才精神科医ハンニバル・レクター博士に、パッファロー・ピルの心理を読み解いてもらうためだった。初めはレクターの明晰さに同居する薄気味悪さにたじろいだクラリスも、自分への相手の興味を利用し、自分の過去を語るのとひきかえに、事件捜査の手掛かりを博士から少しづつではあったが、引き出すことに成功するようになる。曰く、犯人は自分がかつて手がけた一患者を想わ

京都の代表的銘菓、八つ橋の由来については幾つかの説が存在する。「八橋検校」にちなむとしたものは聖護院八つ橋総本店の説明文より。

## ほらふきフェイジョア



世はなべてこともなし、という語句がびたりとはまりこむような青空がひさしぶりに広がった日曜日のこと、私は洗濯物を干すという作業に朝からいそしんでいた。なんせ数日続いた雨のせいで、汚れ物がたまりにたまって見るだけでうんざりするほどだったのだ。そんなわけで週末恒例の朝寝もあきらめて、洗濯機をフル回転させていたのだが、それもやっと終わり、最後の靴下を洗濯ばさみでとめたところで、階下から声がした。

「桃さーん」

ふたたび窓から身を乗り出して外を覗くと、西原さんがこちらを見上げて、散歩に行きませんか？とのんきなことをやけに嬉しげに言った。

その隣、アパートの門灯の横で、彼の飼い猫の八つ橋が前足を揃えて座ったまま、ゆらりと尻尾を振ってみせた。

まず初めにお断りしておく、西原さんというのは、私の隣人である。それ以上でもそれ以下でもない。

たしかに彼の愛猫を預かることはあるし、そのお礼として彼が持ってくるお菓子を受け取るし、ときどきはそれと合う飲み物を出して二人でつまむことはないとはいえないから、最近は茶飲み友達程度には親しくなったようにみえても仕方ないことなのかもしれないが、私は断固としてここに宣言する。

それは、不可抗力のせいであり、あくまで外見上の話である、と。

どちらかといえば、私と西原さんとは『友達』というより『知人』である。もっと正確にいうならば、多少聞こえは悪いが、彼は私の観察対象、である。尋常ではない甘味好き、という点からして私の好奇心をくすぐるには十分だったが、それ以上に、自分のことを大真面目に宇宙人であると言うにいたっては、もう目が離せなくなっても仕方ないではないか。しかも、彼の飼っている猫も、その名前と巨大なサイズ以外にも、どうも普通の猫とは色々と違う奇妙なところがあるようなのである。

はっきりいえば、西原さん（そして彼の猫）は、変、なのだ。それも、ものすごく。

そんなわけで、友人というには、私は西原さんのことをあまりにも知らないのである。そして、正直なところ、この謎が多すぎる隣人を友達と呼ぶのは、ちょっと……躊躇しなくもない。

そこまで考えて、私は隣を歩いている西原さんに尋ねた。アパートから2、3ブロック歩いた地点である。

「どこに行くんですか？」

「秘密です」

西原さんは、ひよろひよろ、という擬音語がびつりの歩き方をしながら答えた。

猫連れだからそんなに遠くには行かないだろうと思っていたのだが、西原さんがひよろ長い手足を交互に出しているのとは対照的に、その肩の上で八つ橋は襟巻きのように体を伸ばしていた。自分では歩かずに、飼い主を乗り物代わりに使ったりするから太るんじゃないかと思ったが、私は口には出さなかった。

「でもすぐ着きますよ、ここを曲がって……はい、到着」

と言われたそこは、何の変哲もない住宅街の真ん中のように見えたので、私は思わずあたりを見回した。

西原さんは、そんな私には構わずに、一軒の家の玄関へと近づいていく。おそるおそる後ろについていくと、彼はその家のインターホンではなくて、その下に生えている木に手を伸ばした。具体的には、その木に咲いている、長くて赤いおしべと柔らかそうなピンクの花びらの、なんだか南国っぽい花に。

そして、「すみません」と謝罪したかと思うと、私があっけにとられている間に、その花から花びらをちぎりとった。

「はい」

さも当然のように手渡されて、私は花びらと西原さんの顔を交互に見る羽目になった。

何がしたいのだろうこのひとは、と思わず八つ橋に助けを求めそうになったが、猫も興味津々といった表情で西原さんの次の挙動を見守っている。私が仕方なく路上で花びらを持っている横で、西原さんはもう一回謝りながら花を取った。そして今度はそれを自分の口の中に突っ込んだ。

「食べた!？」

「はい、おいしいですよ」

これはフェイジョアという木で、本当は実を食べるんですが、花もおいしいです。

にこにこしながら、西原さんは言った。

「前に、六花亭のマルセイバターサンドを食べているときに、雪みたいなお菓子が食べたっていうお話をされていたでしょう。で、ああいうお菓子はまだ見つからないんですが、名前つながりで、花はどうかかなと思って。八つ橋がフェイジョアの木がここにあるって教えてくれたので、花が咲いたら食べてもらいたいと思って。桃さんに」

そんな話をしたことすら忘れていた。思わず返答につまった私には構わずに、西原さんは滔々と語りはじめる。

「はなびら餅でもいいかな、と思ったんですけど。あのお菓子、ご存知ですか？」

正確には、菱葩餅っていいまして、ごぼうと白味噌餡をピンク色のお餅で包んで、その上から円形の求肥か白いお餅を二つに折って半円形に包んだお正月の和菓子です。うっすらと下のお餅の色が透けて見えて、すごくきれいなんですよ。僕はあれを見るたびに貝の剥き身を連想してしまうのですが、本当は宮中のおせち料理を簡略化して配っているうちにあの形になったらしいですね。ごぼうは鮎の塩漬け、白味噌餡はお雑煮の代わりなんだそうです。でも僕としては、元の食べ物より、はなびら餅を貰うほうが嬉しいですよ。

「西原さん」

私は彼の菓子談義をさえぎって言った。

「ありがとうございます。あの、でも、これって」

ドロボウじゃないですか。

たかが花と言っても、明らかに他人のものなのだ。花泥棒に罪はないというが、それは美しさに惹かれて盗った場合であって、食料としてはカウントされないと思われる。

ささやくと、西原さんは愕然としたように目を見開いた。考えていなかったらしい。なぜか肩に乗ったままの八つ橋が、とてもわかりやすく目を逸らした。

「……そううわ痛！」

西原さんは口をぱくぱくとさせてから何かを言おうとしたが、それは八つ橋が爪を閃かせたことで中止となった。痛みに飛び上がって、次にかがみこんだ彼の首元あたりから、八つ橋の唸り声が聞こえてくる。

ようやく振り返った西原さんは、珍しく困った顔をして言った。

「実はこの家は八つ橋のものなんです」

あまりにも無理がある。

私の表情に気がついたのか、八つ橋がまたもやぐるぐる、と唸った。西原さんの表情の困惑度

がさらに上がる。めずらしいこともあるものである。

「といいますか、えー昔は悪い巨人が住んでいたんですが、ネズミに変身した際に、八つ橋がやっつけまして……」 「巨人！？ この家普通サイズなんですが、っていうか『長靴をはいた猫』！？」

私は思わず突っ込んだ。いったい何がしたいのかわからないほどひどい出来の嘘を吐かれて、こちらも動転していたのである。

西原さんは八つ橋とちらりと目を見交わして、また八つ橋が喉を鳴らすのに耳を傾けた。「いや実は、ここは八つ橋のセカンドホームなんです。八つ橋の卓越したネズミ捕りの才能に惚れこんだ奥様がですね、いたれりつくせり、なかなか離してくれなくて……ですから僕達は乗り込んでいって穩便に話し合いを……」

「『オウオウ奥さん、ウチの猫に手エ出すなんて覚悟はできてるんだろうな』って？」

「いやそこまでは」

そりゃそうだろう、そこまでやったら美人局で恐喝である。

「でも、八つ橋の飼い主は西原さんなんですから、本来は、猫の面倒をみてもらっていることに對してお礼をする側なんじゃないですか？」

「……そうですね……」

どうしよう、ちょっと楽しくなってきた。

八つ橋が今度はごろごろという音を立てる。西原さんは、なんだかだんだん困惑というよりは、悲愴という言葉が似合いそうな表情となってきた。めずらしいことも、あるものである。「『でも今ちょっとお金がなくて払えないんです』と言ったら、『それじゃあ仕方ないニャー』と……」

「ニャー！？」

「猫好きの方なんです」

すべての猫好きが語尾にニャーと付けるようになったら、世の中が大混乱に陥ると思ったが、私は言わないでおくことにした。

きっとその場合、犬好きの語尾は『～ワン』である。

「八つ橋はちょうどネズミに悩まされていた、こちらの奥様に召し上げられてしまいます。もし返してほしければ、八つ橋と同じ目方の金を持ってくるように、と」

それは重そうだ。

証明するかのように西原さんは噂の飼い猫を乗せたままの肩を落とした。八つ橋は自分につけられた価値に満足しているらしい、目を細めると、口だけ開けて音もなく鳴いた。

「散々頼み込んで、僕と八つ橋は一週間の猶予をもらいます。でも、その間、ネズミが一匹目撃されるたびに返済金額が1000万円プラスされるニャー、という契約書に泣く泣くサインを」

「いっせんまん！ 高いですよ！」

付け加えるとすれば、ニャーは譲れないらしい。

「嫌いなものをがまんする、ということに値段をつけるとすれば、まだ安いくらいかもしれません」

やけに深刻な顔をして西原さんは語った。

「しかもネズミはその名の通り、ネズミ算式に増えるので大変です」

「そこらへんシビアですね」

「そうなんです。そんな勢いで増える借金に對抗するには、道は一つしかありません。ギャンブルです。僕と八つ橋はまっすぐラスベガスを目指します」

「ラスベガス！」

ずいぶんスケールの大きい話になってきたものである。

「ええ。世界最大の娯楽街。砂漠のただ中にぼつんとある享楽の地。そこに僕と八つ橋は一攫千金を目論んで乗り込み、大勝をおさめます。カードを引けばポーカーの手札は必ずロイヤルストリートフラッシュ、スロットマシンのバーに飛び乗れば7が三つ並ぶ、カジノのオーナー達が血眼でイカサマを見破ろうとしますが、何の証拠は見つけられません。それも当然、すべては八つ橋の幸福を呼ぶ招き猫としての才能にかかっていたのですから。猫と東洋人の男のコンビは

瞬く間にブラックリストに載りつつも、借金返済を着々とこなしていたのですが、」

八つ橋にネズミ捕り以外の才能があることが明らかになったにもかかわらず、どうやらハッピーエンドは遠いらしい。それにしても西原さん、語り口調がだいぶスムーズになってきている。「最後の最後にルーレットに賭けたのが悪かった。ほら、あれって玉を転がすでしょう。あれに、本能を押さえ切れなかった八つ橋が飛びついてしまい、賭けは目茶苦茶に。八つ橋はそのへん可愛いふりなんてできませんから、止めに入ったディーラーや警備員相手に大激闘……」

『シュレック2』に出てくる長靴をはいた猫なら、媚を売ってなんとか切り抜けそうではある。あれは何回見ても騙されるたぐいの可愛さだと思う。

八つ橋には、確かに、無理そうだが。

「そんなことで僕達は、営業妨害をしたということで、これまで勝ったお金を全部取り上げられた挙句、放り出されます」

「あの砂漠に！」

「そうです、水の一滴もなく。どんどん衰弱して、横たわって空を見上げながら、最後に思い出すのは……桃さんに」

何と続けるつもりだ。

ここまで荒唐無稽一辺倒だった話のクライマックスに自分の名前が出てきたものだから、私は固唾を飲んだ。

「淹れてもらったお茶で、はなびら餅食べたかったニャー、と」

「ここまでひっぱっておいて花より団子オチ!？」

しかもまさかのバッドエンドである。

それなのに語尾がニャー。

というか、結局何の解決にもなっていないことに気付いてほしい。

やってられん、という雰囲気を見事に漂わせて、くあ、と八つ橋が顔半分ほどの大口を開けてあくびをした。その気持ちは私もわからないでもない。

「あの、でも、桃さんはまだ食べる前ですから無罪……」

言いかけた西原さんを、私はさえぎった。

「いえ、私も食べます」

私は、言うが早いか、ぱくりと、話の間ずっと指先だけで持っていた花びらを口に含んだ。

……ところで、咀嚼しながらやっとながら気がついたのだが、目の前の車庫は空っぽだった。

車もないし、これだけ長い間、家の前に立ち尽くしていても、中に人のいる気配はなかったということは、きっと住人は、ひさしぶりに晴れた週末に出かけているのだろう。それなのに、よくもまあ、花一つで大騒ぎをしたものである。

自分がきっかけを作ったことは棚にあげて、私は呆れた。花を取って食べてしまったことには変わりはないのだが。

すみません、と心の中で詫言ってから、もうひとつ、好き勝手な設定を作ってしまったことに対して、すみません、と付け加える。

特に、語尾がニャーというのは、もしも本当に猫好きだとしてもいただけないだろう。

「おいしかったです」

食べ終わって報告すると、「それはよかったです」と言う西原さんと、彼の肩の上の八つ橋が揃って目を細めた。確かにものすごく、変な一人と一匹なのだが、口に出した本人さえ忘れていようなことをおぼえてくれて、そのために何かしてくれる。

たとえそのやり方がちょっと常識から外れているとしても、存在自体に謎が多くても。

ただの知人であるにはもったいないかもしれない、のかもしれない。こんなこと考えてどうな

ることでもないし、空は青いし、世はなべてこともないし、なるようにしかならないものだけ  
れど。知人を飛び越えて、窃盗の共犯者になってしまったことだし。

「お礼というにはなんですが、帰ったらお茶はいかがですか？」

とりあえず訊いてみると、バウムクーヘンがあります！という声と、本当の猫の鳴き声の二重  
奏で返事があった。

思わず笑うと、花の、優しくほろりとした食感と、ほのかに甘酸っぱい味が舌先にまだ残っ  
ているような気がした。

Kokon-Tozai



Kanmi-Jijyo

# Menu

- Sweets** ..... フェイジョアの花  
はなびら餅（友情出演）
- Drink** ..... たぶん帰ってからカモミールティ  
（花つながりで）
- Movie** ..... シュレック 2（2004）  
監督：アンドリュー・  
アダムソン 他



## フェイジョア Feijoa

南米原産の常緑低木。葉の裏に白く柔らかい短毛が密生する。気温により異なるが、日本では4月～7月の間に開花する。花の大きさは直径4cmほど。中央から、赤いおしべ（おしべの先端は黄色い）が放射状に伸びる。花びらは表面は白色、内側は赤～暗紫色で分厚く、甘みがあり食べられる。中秋から晩秋頃に食べごろになる果実は長さ5cmほど。果肉は中心はゼリー状だが、しかしシャリシャリした梨のような歯ごたえがあり、パイナップルとバナナとリンゴを混ぜたような芳香があり、美味…と聞くと実は食べたことがない。フィジョア、パイナップルグアバとも呼ばれる。

シュレック2で登場した「長靴をはいたネコ」こと「プス」は同シリーズのスピノフ作品「長靴をはいたネコ」(2011)の主演となった。

↑ シュレックシリーズ:シュレック、シュレック2、シュレック3、シュレック・フォーエバー

様々な苦難を乗り越え、めでたく結ばれたシュレックとフィオナ姫（※『シュレック』）。2人がハネムーンから戻った時、“遠い遠い国”に住むフィオナ姫の両親ハロルド国王とリアン王妃から“結婚を祝う舞踏会”の招待状が届けられる。シュレックとフィオナ姫は、ドンキーも連れて現地へ赴くことに。しかし、彼らが到着すると、ハンサムな王子の登場を期待して歓迎ムード一色だった全国民は、シュレックの容姿を見て愕然、国中に動揺が走るのだった。

シュレック2



## ふいうちチョコトリュフ

一年前のバレンタインデーに何をしていたかおぼえている人間というのは、一体この世に何人いるものだろう。

私はおぼえている。というより忘れられない、といったほうが正しい。

なぜかという、それは私が人生のなかで初めて出来た彼氏に振られ、そして西原さんに初めて出会った日だからである。

……ここで補足説明すると、西原さんというのは宇宙人を自称する隣人である。

甘いものがないと生きていけないと豪語する彼は、言葉通りの意味で三度の飯よりお菓子を愛している。趣味は各地の銘菓収集、家にいるときはコンビニにて期間限定や新作菓子のチェックを欠かさない。奇人ではあるが今のところ別に害はなく、彼を観察するのが私の日課となっている。

宇宙人かどうかの真偽は明らかではないが、あやしいところを数えれば数限りない。そんな彼と出会ったときのことを、そんなにたやすく忘れることができるだろうか。いやできまい。それが製菓会社の陰謀によってつくられた国民的イベントのある日だったとしたら、なおさらのことである。

そのとき私は手の中の包みを呆然と見下ろしていた。

小さいけれど、これにかけた情熱は誰にも負けないと自負している。材料は吟味したし、ラッピングにも時間をかけた。足りないのは渡す相手だけだった。

それも昨日までは存在していたのだ。私と彼は同じ町出身で、二人ともが別の大学に入ってから遠距離恋愛を強いられていた。まあ、双方の性格からして長続きするわけがないのは、わかっていた。最後はもう情性だけしか残ってなくて、どちらが別れを言い出すか、という状況だったのも充分理解してはいるのだ。

だがしかし。しかし。

そっけないメール一通で二ヶ月ぶりのデートをキャンセルしざまに、あっさり別れを告げるというのはどうだ。しかもバレンタイン当日に。

何週間も前からアイデアを練り、昨日は徹夜までして丹精込めて作り上げたチョコトリュフ。

私の目の前で食べてほしかった。自分で食べるなんて考えられなかった。これは食べてもらうために作ったものなのだ。私が食べられるわけがない。

捨てるには多くの時間と費用をこれに費やしすぎていた。もったいなくてそんなことは出来ない。

悶々と悩み、もうどうしたらいいのか分からなくなっていたところに、彼はやって来たのだ。

「隣に引っ越してきた西原と申します」

いっそ憎らしいほど軽快に鳴るインターホンに出てみたら、外に立っていたとっばいスーツの兄ちゃんが笑顔で挨拶した。そういや昨日、引越ストラックが家の前に止まってるなあとは思っ

たのだ。ずっとチョコ作りにかまけていたので、どの部屋に入居したのかまでは分からなかったが。

私の部屋は二階の角なので、これから彼、西原さん、が私の唯一の隣人となるわけである。

「大洞 桃です。よろしくお願いします」

「こちらこそ」

名前を頭にたたきこみながら挨拶を交わす。銀縁眼鏡が妙に似合ったひょろりとした男性だった。ぱっと見には若く見えたが、向かいあってみると思ったより年上かもしれない。

手渡されたのは、いまだき珍しい引越し蕎麦だった。受け取ろうとした際に、片手がふさがっているのに気付く。何かと思ったら、例の包みを握りしめたままだった。

その瞬間、私の耳元でささやいたのは悪魔だったにちがいない。

「あの……お返しというのなんですが、チョコレート、召し上がります？」

「いいんですか!？」

子供のように顔を輝かせて、西原さんは私が差し出した包みを両手で押しいただいた。目の前でためらいなくリボンをほどいて、箱を取り出す。

それにしても初対面の相手から何かをもらったら、普通もっと警戒したりしないだろうか。近頃は子供でも知らない人からは物を受け取らないというのに。

「手作りですか？」

「ええ一応」

蓋を開けると、作った私でさえほれほれするような、つるりとした曲面が美しい茶色の球体が四つ。彼は心から嬉しそうな、とろけるような笑顔で、ぽんっとその内の一つを勢いよく口に放り込んだ。

いい食べっぷりだ。

が、しかし。一回咀嚼したとたん、それが非常に微妙な、形容しがたい表情に変わる。

私はそんな彼の顔をじっと見つめた。

「えっ、ええっと、おいしいですよ……？」

そんな無理しないでいいのに。と思わず同情してしまうほど、嘘だとバレバレの上ずった声で西原さんは言った。困った顔がどんどん上気して赤くなってきている。

と思いきや、瞬間的に何かが切り替わったようで、一気に血の気が失われたかと思うと、顔色は真っ青、唇は紫色へと変化した。

そして赤くなった。

それから青くなった。

それからまた赤くなった。

私は小学校の時の、理科のリトマス紙の実験を思い出した。

しかし、ここから色の変化は次第にゆるやかになってきていた。オレンジ。黄色。緑、その次は青。それがどんどん濃くなって藍色。そして最後に紫。虹の七色、レインボーカラー。

「うう、うめぼし……!？」

そこでついに彼の唇から、押し殺したようなつぶやきが漏れた。

アタリだ。

私は身体の横で手を握りしめた。

ここまで過激な反応が出るとは予想もしていなかったが、これはまたほれほれするほどナイスなりアクションだ。元の彼氏ではここまでイイ反応は得られなかったにちがいない。

四つのトリュフのうち、アタリは一個。

他は普通だが、それだけは特別に、さまざまな食材とチョコレートが組み合わせてある。

思いついたのは、映画『ショコラ』を見ていたときだ。謎めいた母娘が、ある保守的な村にやってきてチョコレート屋を開く。そんな彼らが、元気が出る、と客に出すのが唐辛子入りホットチョコレート。意外なそれが隠し味となっておいしいらしいのだ。

そんなわけでアタリのトリュフは、梅干を核にしてある。映画に対抗するため……もとい消化を促進するために山椒も入れた。食いあわせが心配だったので、正露丸も砕いて入れてある。正露丸のあの独特な匂いを消すために、チョコレートはリッチでダークなものをふんだんに使用した。他にも色々入れたのだが、それは企業秘密だから言えない。

最後のほうは、どれだけ突拍子もないものを口に入れるまでバレないように混ぜ込めるか、というやや本末転倒の目的になってしまっていたことは、ここだけの秘密である。くさやを混入する方法を思いついたときは、自分のことを天才かもしれないと思った。

が、いざさかやりすぎたかもしれない。

西原さんの顔は紫を通り越してどす黒くなっていた。ふらりふらりと上体が大きく揺れている。

「だ」

いじょうぶですか、と声をかけようとしたその瞬間。彼の身体が宙に浮いた。

揺れすぎてバランスを崩し、手すりを乗り越えてしまったらしい。

「なんて分析している場合じゃないってば!!!?」

私はあわてて玄関から飛び出すと、西原さんがさきほどまで立っていたところに駆け寄り真下を覗いた。

自分が調理したものを食べて人が死んでしまった場合、やはりそれは過失致死ということになるのだろうか。故意はなかった。本当になかったのだから、殺人とまではいかないと思う。そして私はプロの料理人というわけではないから、「業務上」過失致死というわけではないだろう。しかも私のチョコレートは引き金となっただけで、直接の死因ではない。とそう思いたい。何はともあれ新しい隣人の生死を確認するのが一番である。

ああお願いですから生きていて。 だらだらと冷汗を流しながら見下ろした先では、ちょうど運良く植え込みの上に墜落した西原さんがのろのろと起きあがるころだった。

「お茶を淹れるのはお上手なんですね」

「……ありがとうございます」

悪気のない言葉が痛い。

「本当に申し訳ありません……」

「いやいやいつも八つ橋にやられてるのに比べればぜんぜん大丈夫です」

「……やつはし？」

「ああ！ 猫です。一緒に住んでるんです」

どんなバイオレンスな猫だ。

一階に駆けおりた私を待ち受けていたのは、小枝で出来たひっかき傷以外、まったく五体満足無事な西原さんだった。自分が殺人犯にならなかったことを喜ぶ間もなく、「み、みず……」とうめきながら気絶しそうになった彼を、部屋にあげて水を飲ませ、人心地ついたところでジャスマン茶を淹れたところである。

口の中に残った後味を洗い流すには、強い芳香を持ったこのお茶が一番だ。中国茶は小さい茶碗で何回もゆったり飲むものだから、心を落ち着けるにもいい。

「私も猫大好きなんですよ」

「そうですか、じゃあ今度お目にかけますね」

面白い名前ですね、そうでしょうか、などと雑談し、さきほどまでの状況を忘れたように、おだやかな雰囲気の中二人してのんきに笑いあった。

その一週間後に約束通り私は八つ橋と対面し、この出来事の引け目もあって、西原さんが出張している間、その巨大な猫の面倒を見ることになったりもした。そんなこんなで一年はあっとい

う間に過ぎさったのである。

しかし、さすがの西原さんといえど、あのチョコレートは忘れられなかったらしい。

一年後の二月十四日。西原さんは真剣な顔でゆっくりとチョコレートケーキを食べ終わると、フォークを下に置きながら、これ以上ないほどに大きく息を吐きだした。

「どうでした？」

「あーあの、おいしかったんですけど、おいしかったんですが、でもなんか、ものすごく覚悟して、生命保険にも新しく加入して、昨日はもう眠れなくて、ちょっと見納めになるかもしれないなんて思ったので両親に会いに行ったりもして、それで食べて普通においしかったらなんか拍子抜けするっていうか……」

……そこまでしてなぜ食べるのかが私にはわからない。

私は一応、あんなことがあった後でも今年のバレンタインチョコがほしいかどうか聞いたのだ。ほしいと答えたのは西原さん本人である。

というか西原さんの実家とはどこだろう。両親が住んでいるのは、やはり宇宙なのだろうか。ウールトローラーのははー、などと古い歌が頭の中で鳴りひびく。

「なんだったら、またあれ作りましょうか？ レシピもありますし」

「いいえ！ いえ結構ですよ!!!」

「そうですか」

私は軽く笑って受け流すと、鼻歌まじりに空になった茶碗をまた温めた。

西原さんのことだからホワイトデーを忘れるなんてありえない。お返しに前にももらったロイズの生チョコだったらうれしいなどと勝手なことを思ったが、西原さんの買ってくるお菓子だったら多分どれでもおいしいだろう。

一ヵ月後が楽しみだった。

Kokon-Tozai



Kanmi-Jijyo

# Menu

**Sweets** ..... チョコトリュフ (桃 自作)

**Drink** ..... 茉莉花茶

**Movie** ..... ショコラ (2000)  
監督: ラッセ・ハルstrom

## Earl Grey Chocolate Truffles

(↑アタリ以外の分) の作り方



紅茶の茶葉を少量の熱湯で蒸らして、葉が開いたら沸騰している水に加えて火を止めてもっと蒸らします。味が十分出るまで。そこに生クリームと牛乳を沸騰させたものをいれます。で、ほっときます。その間にミルクチョコレートで刻んでボウルに入れて、水あめを合わせて、そこに、さきほどの紅茶+生クリーム+牛乳を漉しながら注ぎます。チョコレートが溶けたらなめらかになるまでがんばって混ぜます。粗熱がとれたら、柔らかくしたバターを加えて混ぜます。さらに冷まして絞れる固さになったら、絞り出し袋に入れて、クッキングシートの上などに丸く絞り出し、冷蔵庫へ入れましょう。中身を冷やしている間にコーティング用のチョコレートを溶かして、人肌程度の温度にします。中身が冷えて固まったら、一個ずつ両手で転がして丸く形を整えます。手のひらにコーティング用チョコレートを少しつけ、中身の表面につけて冷し固めます。最後の仕上げに、全体にコーティング用チョコレートをもう一回つけて冷し固めます。……最後の手がべとべとになって大変なところは、お店で売っているトリュフボールを使えば一気に楽になります。えっ、アタリの方に何を入れたか？ 企業秘密です。でもチョコレートで包むだけでどれだけ臭いがシャットアウトできるかには感動した… (大洞 桃 談)

フランスの小さな村。レノ伯爵の猛威で因習に凝り固まったこの村に、ある日、不思議な女ヴィアンヌと娘アヌークが越してきてチョコレート店を開く。次々と村の掟を吹き飛ばす二人の美しい新参者に、訝しげな視線を注ぐ人々。しかし、チョコレートのおいしさに魅了された村人たちは、心を開き、それまで秘めていた情熱を目覚めさせていく。そして……

ショコラ

